

人生を拓く

66

なかの野愛子さん(88)
12区

愛子さんは、長谷田作次郎さん(72歳没)とセキさん(72歳没)の6人姉弟の2女として東神楽町稲荷に生まれました。

子どもの頃、戦時中のため高等小学校(当時)は勉強どころではなく援農が主でした。毎日お弁当を持って校庭に集まり、数人の組で農家の手伝いに行っていたそう。帰路は何キロもあり、日暮れの早い秋は月明りだけが頼り。一人で怖くて夢中で走ったことを覚えているとか。卒業後は親の農家を手伝いました。楽しみは冬に年2〜3回、姉と旭川へ映画を観に行くこと。橋のたもと、の渡船場にいるおばあさんにお金を払って東旭川まで出て、市街行きの電車に乗ったそうです。

結婚は22歳の時。行商をしていた仲人に紹介された光一さん(82歳没)はまじめで働き者。その腕を見込まれて旭川の建設会社に約45年間帳場として勤めました。娘2人と息子1人に恵まれ、家庭では大変子煩悩な父親だったそうです。現在は孫4人、ひ孫も2人になりました。

愛子さんは毎朝夫のためにお弁当を作り、2町5反の水田をほとんど一人で担いました。四国出身の舅さんは教養があり、筆字の才能があったそう。愛子さんを「お母ちゃん」と慕う舅さんが入院した際は、毎日のように好物を作って届けました。後に姑さん



が老衰で寝込むと、家で看ようと決心。農家をしつつ食事などの世話をするのは簡単ではないと実感したそうです。姑さんは動き回って目が離せない時期もありましたが、3年の介護の後、自宅で亡くなりました。その際、夫の弟が兄弟を集め「今までよく見てくれました」と頭を下げてくれ、それまでの苦勞が洗い流されたのか「心の中が空っぽになってしまった」とのこと。夫婦でのんびり過ごしたのは70歳から10年ほど。一緒に四国旅行した際に夫の兄にももらった四国88ヶ所の掛図が今も床の間を飾ります。夫が亡くなり約10年。今は近所にいる末の妹さんや友人がよく訪ねてきます。娘さんも時々来て外回りのことをやってくれるそう。息子さんは心配しながらも「母さんはここに住んでいたいんですよ」と気持ちを探し、愛子さんが旭川に通院する日は送迎してくれます。

愛子さんが人生で一番大事にしているのは家族が仲良くすること。その思いは若いころから変わらぬ、花を愛する愛子さんらしい信条です。3年ほど前のある日、庭の花を整理していると散歩していた人から「花を片付けるのですね。長い間楽しませていただきありがとうございます」と声をかけられビックリしたというエピソードも。幸福な人生は周りの人も幸せにするようです。

俳句

陸奥秋天楳円のボール蹴り上げろ
一振り三日冬引き寄せる秋の雨
声細く冷氣一際ちらる虫

秋深し武蔵読みつつ夜の更ける
神無月一日の命謝すること

ジビエハンター銃声深く森は秋
開演を待つ前列に秋袷

今朝の秋ラストシーンを窓越しに
過疎の町バスを待つ間の秋惜しむ

植え替えた葉牡丹カラスの餌となる
秋色のさざめきの下でレレレのレ

宵寒やとこで母さん達者かと
南瓜の種今年も干して袋とじ

各界の卵が光る運動会
秋桜や倒れてもまた微笑んで



小林ろば

石澤清宏

杉山ひろのり

横田則子

杉山りつ

高瀬潤

三島智

若田郁

佐々木りえ

本田咲

こばやし 星来

保科なほ

斎藤夕桜

山内みゆ

八田昌代